

フェーズ I 試験結果報告

昭和六十四年（一九八九年）一月七日

午前六時三十三分、昭和天皇、崩御。

皇太子明仁親王が即位。

元号法に基づき、改元の政令が出される。

翌日、一月八日午前零時をもって、自動的に
「修文元年一月八日」と改元がなされる。

- 二二号 失敗、処置
- 二三号 失敗、処置
- 一四号 逃亡、処置
- 一五号 失敗、処置
- 一六号 失敗、処置
- 一七号 失敗、処置
- 一八号 失敗、処置
- 一九号 成功、フェーズIIへ移行
- 二〇号 失敗、処置
- 二一号 失敗、処置
- 二二号 失敗、処置
- 二三号 失敗、処置
- 二四号 経過不良、処置
- 二五号 経過不良、処置
- 二六号 失敗、処置

承認日 修文二十六年（二〇一四年）八月二日
承認番号 C六六七・〇〇四九
実験の結果 計画どおり実施

- 〇一号 失敗、処置
- 〇二号 失敗、処置
- 〇三号 失敗、処置
- 〇四号 経過不良、処置
- 〇五号 失敗、処置
- 〇六号 失敗、処置
- 〇七号 失敗、処置
- 〇八号 失敗、処置
- 〇九号 失敗、処置
- 一〇号 失敗、処置
- 一一号 失敗、処置

- 二七号 経過不良、処置
- 二八号 経過不良、経過観察
- 二九号 失敗、処置
- 三〇号 失敗、処置
- 三一号 経過不良、経過観察
- 三二号 失敗、処置
- 三三号 失敗、処置
- 三四号 失敗、処置
- 三五号 自傷行為の傾向あり、処置
- 三六号 失敗、処置
- 三七号 失敗、処置
- 三八号 失敗、処置
- 三九号 失敗、処置
- 四〇号 経過不良、処置

【特記事項】

今回、四十体の被験者のうち、成功一体という結果が出た。経過不良も含めれば、前回（報告書番号C六六三参照）から、飛躍的に成功率が上がったといえる。

試験番号〇一九号はフェーズIIへ移行。

○三五号の処遇については、生体部分の損耗は少ないため、今後快癒するようであれば、実験を続行する。

○一四号は廃棄物処理特別措置法に基づく限定的生体廃棄物処理マニュアルに依り、処置完了。最終処分終了報告は報告書番号D一八五を参照されたし。

名もなき歌

No.33

夢を、見ました。

歌を歌う……そんな夢です。おかしいですよ、歌なんて。

だって、私は《艦娘》ですから。

歌なんて似合いません。そもそも、艦は歌えないでしょう？

私に似合うのは、海、そして戦争。戦うために生まれてきたのですから。ええ、もちろん、沈みたくはありません。今は人間の身に宿っているとはいいえ、艦としてあるべき姿は、果たすべき使命は、最後の最後まで戦って、そして勝って、皆で国へ帰ることですから。大切なものを守るためには、負けてはいけません。勝たねばならないのです。私はそう学びました。この身をもって。

私が生まれたのは戦うため。

そのために、私は作られ、必要とされてきた——かつてそうであったように、今も。そうなのでしょう？ 私がふたたび生まれた理由。

そして今、こうして生きている理由。

戦争が起きる。私たちが必要とされる時が来た。

それは悲しいことで、愚かなこと。

……そう答えるのが、この時代では正しいのでしょうか？ おかしいですね、悲しく愚かなことをするために、あなたたちは私たちを再びこの世に作り出したのですか。

あの戦争のあと、あなたたちは「過ちは繰り返さない」と誓ったのだと、うかがいましたよ。それなのに、どうして？ 嫌味ではないですよ、ただ……いえ、なんでもありません。そう、夢の話でしたね。ごめんなさい、話題を戻しましょう。

そう、私が見たのは歌を歌う夢でした。もちろん、歌というものがなんなのか、ちゃんと知っていますよ。もちろん聞いたことだつてあります。この形になる前、艦であつたころにも。歌は嫌いではありません。ええ、そうですね、とても好ましく思いますよ。

私を見送る歌、私に乗る人を見送る歌、私に乗る人たちが、自らを鼓舞するための歌、故郷を思う歌——ずっと聞いていました。波の音にも、機関の音にも負けず、その歌は私に聞こえたんです。不思議ですね、私は艦で——こんなふうに、耳なんて、なかったのに。私自身が歌いたい、と思ったことは、たぶんなかったと思います。私は聞くだけ。耳もなければ口もない、鋼鉄の塊。それが私でしたからね。歌うという発想そのものがなかったと思うんです。

でも、本当にそうだったのか、ちょっと自信がなくなってきました。自分のことなのに。これもきつと、夢を見たからでしょうね。歌を、歌う夢。歌うというところが、本当はどういう行為なのか、私はまだ知らないのに。だって、私、今でこそ人間と同じように、耳も口も指も持っていますけど、声を出すのは、こうやって誰かと話すときだけ。歌ったことなんてありません。やりかたもわからない。あなたは私にいろいろなことを教えてくださるけれど、歌いかたはまだ教えてくれていないでしょう？ それでも、私は歌っていたんです。夢の中で。

……ああ、でも考えてみれば、歌がどうのという以前に、夢を見るということ自体、おかしな話ですね。私、自分が夢を見ることができただなんて、思いもしませんでした。眠るということも、本当は、まだ慣れません。体にとつて必要なのはわかるんですが……それが私にとつても必要で、そして当たり前のことになるには、まだ時間がかかりそうです。

本当に、すべてが手探りなんです。毎朝ここで起きて、この手を見て、ああ私は人間なのだと確認する。これは、艦だったころにはなかった部品ですから。起き上がって、あそこにある鏡を見て、そこに映るのが人間になった私なのだと確認する。そう

しないと、自分が今どうしてここにいるのか、わからなくなってしまいそうです。

こうしてあなたと話してるのも、不思議な話だと思えます。まるで人間のように顔を合わせて、会話している。いったい、どういう奇跡なのでしょう。艦としての私は、間違いなくここにいる。でも、いまの私は艦ではなくて、人です。人間のやわらかな体。こんなにやわらかいの、どうして人は戦うんですか。脆くて、これではすぐに壊れて、あつという間に死んでしまうではありませんか。あの人たちもそうでした。

この体になってから、艦娘になってから、よく思い出すんです。散っていった、あの人たちのことを。あの人たちがいたから、私は戦えました。最期のときまで。用なしだと、海に沈められてしまうまで。あれは……本当に屈辱でした。はつきり申し上げますわ。思い出すのも忌々しい。砕けたこの身が沈んでいくまで、見上げていた空のこと。どんどん遠くなる水面も。

忘れてしまいたいの、今でもはつきり思い出せる。他の姉妹は、最期まで勇敢に戦ったというのに、私だけ、どうして、私だけが、惨めに恥を晒さねばならなかったのです。艦だから、生きものではないのだから、なにも感じていないとでも思いかしら。あれは、まさに辱めとしか言いようがありません。本当に、本当に。

……いえ、だいじょうぶです。ごめんなさい。今日はなんだかどんどん話がずれて
いってしまいますね。あの人たちはよく歌っていました。私は、艦だっだけれど、そ
れをずっと聞いていました。

そう——夢の話でしたね。夜でした。薄い雲が月を隠していて、でも月光までは
遮ることはできず、私は思いのほか明るいものだと感じていました。これでは敵に
も見つかりやすくなってしまうとは思いつつ、でも、その明るさに、なんだか心がや
すらぎました。今夜は交戦はないかもしれないと、ふと息をつくような。このまま夜
が明けてしまえばいいのに、とそう思いました。

そんなときでした。最初はそれがなんなのか、よくわからなかったんです。風と波
と、機関部の音、それに混ざっていて、うまく聞き取れなくて。夢の中の私は、艦な
のか、人間なのか、どちらだったのか、思い出してみようとしているのですが、よくわ
かりません。でも、機関部の回転数はゆっくり落ちていって、どうやら速度を落とす
ているのを感じました。あれは私の機関部だったのかしら……。

そうして、波の音が大きく聞こえてきて……。そして、遠くからかすかに、でもや
がてはつきり聞こえるようになりました。

歌が、聞こえる。

夢のなかの私は、そう思いました。これは、歌だと。そして、それは一人が歌って
いるのではなくて、たくさんの方の歌声なのだとかったときには、私も一緒に歌っ
ていました。夢ですからね。実際の経験がなくても、できてしまうのですね。そうや
って歌い始めてから気づいたんです。

これは、あの歌だって。あの人たちが、あの日、大切そうに歌っていた歌だと。

最初は小さく、声にも出さず、ただ口の中で。それは、きつと音ですらなかったで
しょう。いつも私は聞いていただけでしたから。いざ自分が歌うとなると、うまく思
い出せなくて。けれど、間違いない、私は歌っていました。

勇ましいことばを、音に乗せて。

優しいことばを、音に乗せて。

そして目が醒めて——今、ここであなたと話しているというわけです。

あの人たちは、この《妙高》と最後まで一緒に戦ってくれた、あの勇ましくて優し
い人たちの魂は——帰りたい場所へ帰れたのでしょうか。

今さら改まつて書くことでもないが、それでも書いておかないと後悔するかもしれない。今はそういう気分です、明日になれば変わるかもしれないし、ずっとこのままかもしれない。君をだしにするように申し訳ないが、君がこれを読まなければいいだけの話だとも思えて、つまり私の告解に、君の意志を確かめないまま、延々とつきあわせているのは申し訳なく思う。

傍^{はた}から見れば仕事をしているように見えなくてもないし、ちようどいいかもしれない。どうせ家に帰ったところでやることはないし、そもそも帰らない。ここで寝て、また朝を迎える。シャワールームが自由に使えるのはありがたいな。どうせ本省^{ほんしやう}の連中専用だろうと思っていたが、さすがにそれくらいの便宜は図ってくれているというわけだ。シャワーを浴びたら、地下二階のクリーニング屋に行って、今日もこのままここで寝て、明日もその繰り返し。本当にここは外に出ないでも成り立つ世界だ。

もういい加減、あの部屋は引き払ってもいいかもしれない。今はまだあそこに戻るのには、難しい。無理だ。帰らなければならぬのはわかっているんだが。必要なもの

もあるし、取りに行かないといけないのもわかっている。自分が行けないなら、誰かに頼んでもいいはずなんだが、他人をあそこに入れるのは嫌だ。だから、自分が行けばいいんだ。住んでいるんだから。あの部屋の家主は私だ。でも、ドアを開ければ、あの部屋は、あの日のままでだから、それがわかるから、なおさら帰れない。

これはキーボードだから、おそらく筆が滑るという表現はしなないと思うが、気がつくくと指が勝手に動いているのだから、これはこれで筆が滑るといっても差し支えないのかもしれない。いつのころから、人間はこの十本の指と、己が語りたことを直接させるようになったんだろう。不思議だ。これが昔みたいに、ペンと紙という形式だったら、これだけの文字を書くのさえきつと億劫^{おっくう}で、ほんの一、二行程度書いて、そこでやめていただろうな。

私は、おそらくこれから君が思う以上に、だらしがないんだ。根気もない。本当は、それがよかったのかもしれない。どんなに言い繕^{つくろ}ったところで、要は私がただ吐き出したいというだけで、君をつき合わせることに本当は意味なんてないのだから。ななてことだ。わかっているのにな。結論が出ていても、指は動く。ああ、これを君が読まないことを願う。

いや、書いたところで消してしまえばいいんだがな。保存しなければいいだけの話で。そうだ、そうしよう。書くだけ書いて、残さない。それでいい。

だから、これから書くのは、私がなにをして、なにをしなかったか。なにを選んで、なにを捨てたのか。ただそれだけの、選択の繰り返しをテキストデータに置き換えてみただけで、残すべき価値のない落書きみたいなものだ。わざわざ書き残すような華々しい人生を送るような人間なんて、ほんのひとにぎりだろう。私はそういう存在ではなかった。だから、これでいい。書くだけ書いて、消えていくだけの文字列。そんな程度でいいんだ。

君がやがて私の年齢を追い越すころには、さすがに「戦争」も終わっていたらいいんだが。今のところ、ほかにどう表現したらいいか、適当な言葉が見つからないから我々はあれを「戦争」と言っているが、なんていうことはない。海に棲む厄介な生物と、人類の縄張り争いだ。戦争という言葉がひとり歩きしているだけで、結局はその程度のこと。進化の過程で、いつでもどこでも、この地球上で起こっていただろう、よくあるできごとだ。種の存続が懸かっているかもしれないという点では、たしかにこれも戦争だろうな。とはいえ、海のすべてが危険だというわけではないのは、常識

だ。今では小学校でも習うらしいよ。時代は変わるな。

君もいざれ知ることだが、要は、あいつらの縄張りに入りさえしなければ、どうということはないんだ。見た目はあんな感じでも、そのあたりは野生の動物と変わららないな。人食い鮫と深海棲艦と、どちらがより身近で危険か。鮫映画を見たあとだったら、鮫かもしれない。映画の鮫は意図して襲ってくるから。どちらにしろ、実際に海で出会う確率でいえば、どっちもどっちだ。

要は、わかっている危険に頭からつつこまなければいいだけの話で、だがそういう理屈がわかるまでは、たくさん犠牲を出した。悲しい話だ。今の私の職場でさえ、鎮魂祭が行われているよ。ここでもやるのかと正直驚いた。君もいつかはああいう行事に参列しないといけないのかもな。さっさと廃れてしまえばいいんだが。

深海棲艦とは、意外と棲み分けが可能だということがわかるまで、世界中で死んだ人間の数は四桁、五桁で足りるかどうか。気づかれていない、つまり遺体が見つからなかった人や、家族親戚一切合切まるごと死んだような人は、この数に入っていない。死んだことさえ気づかれていないからだ。気づいてもらえなければ、生きていた証明さえできないんだ。君にはそんなことがないよう祈る。

私は間違いなく君より先に死ぬから、私は君の生存証明をすることはできない。できないほうがいい。そうであってほしい。

これまでの犠牲者の正確な数は忘れたが、つまり忘れる程度には遠い話というわけで、その犠牲すべてが、無駄な死だったとは思いたくないのは、人間の性だ。こればかりは理性でどうこうできる問題じゃないだろう。

まるで昔の映画みたいに、人類は海に棲息している危険生物を撃退しようと討って出た。そのころはまだ、深海棲艦の生態はわかっていたいなかったし、自衛隊の部隊や船がたくさん海へ向かって、そのうちのいくつかは誰も帰ってこなかった。テレビのトップに毎日流れるんだ。殉職者の名前と、階級、年齢もね。あれは気が滅入るよ、なかには私よりずっと若い子もいた。芸人がどれだけ面白いネタをやっているか、その頭のあたりにいつも死者の名前が表示されるんだ。笑えるものも笑えないよ。でも、それでも、結局は字幕でしかない。私の知り合いではないし、顔を見たこともない。名前だけの彼らすべてを悼んで泣くには、さすがに数が多すぎたんだ。

だけど、彼らのおかげで生態も、特に深海棲艦のテリトリーがわかった。彼らがいなかったら、今でも私たちは、海からなるべく離れた内陸部でひっそり息を殺して、

海外からの空輸に頼って細々と暮らしていただろう。それはいいんだ。問題があるとすれば、撃退のためになにを作ったか、だ。相手は海にいる。海の生態系を考えると、生物兵器や化学兵器は使えない。核はもつてのほか。この国で核は最大のタブーだからね。軍事力を持たないということは、今でも私は素敵なことだと思っているよ。平和な世の中であれば、もつと素敵なことだっただろう。

早い話が、国を挙げての害獣退治とはいえ、いくらなんでも人が死にすぎた。殉職した数と、自衛隊や消防士を志願する人間の数とで、バランスが取れなくなってきた。銃度も確保できない。深海棲艦とやりあえる人間がいなくなったら、それこそ私や、君まで駆り出されるかもしれない。学徒動員なんて、そんな言葉は教科書の中に封じておけばいいんだ。かといって、この国は海に囲まれていて、海上輸送がなかったら、あつという間に干上がってしまう。

君にはもしかしたら、ばかげた話に思えるかもしれない。この国はね、ちよつと前まで、自力で国民を食わせることができなかつたんだよ。それくらい、海外からの輸入に頼っていた。原油どころか食料さえ。空に害獣が出なくてよかつた。もしそうなら、もうまさにお手上げだ。

ああ、ずいぶん話が横滑りした。思考があちこちに散らばってる。よくない傾向だ。今日はもう寝たほうがよさそうだ。明日もまた、あれ、いや兵器と言うべきなのか、どうにもまだ慣れない。きつと一生慣れないだろう。慣れたらお終いのような気もする。どうなんだろう。たしかに、あれが本格的に導入されれば、自衛隊や海保の犠牲は減るだろうし、今の子どもたちも、あんな危険な場所に行かなくて済む。それはわかっているんだが。

それじゃ、おやすみ。また明日。